

神奈川県内の「やぐら」集成(6)

－「やぐら」出土遺物の分析(2)－

中世プロジェクトチーム

はじめに

本プロジェクトでは、近年発掘調査によって資料が増加している「やぐら」に焦点を当て、集成を行っている。昨年はこれまでの集成に基づき「やぐら」出土遺物の分析として、土器・陶磁器類について出土様相の考察を行った。本年は、引き続き出土遺物の分析として、石塔類・瓦・土製品・金属製品・石製品・木製品の分析を行うこととする。

なお、これまでの集成と同様に、分析にあたっては原則として、発掘調査が行われ、かつ報告書が刊行されている遺跡を対象とする。また、「出土遺構」については、やぐらの前面や区画遺構などやぐら内外の各遺構面が含まれていることについても、これまでと同様である。

石塔類は、研究紀要10で集成を行っている。今回はこの集成以降に刊行された報告書のデータも加えて、宝篋印塔・五輪塔・板碑について分析を行う。また、その他の遺物として瓦・土製品・金属製品・石製品・木製品についても若干検討を加えることとした。

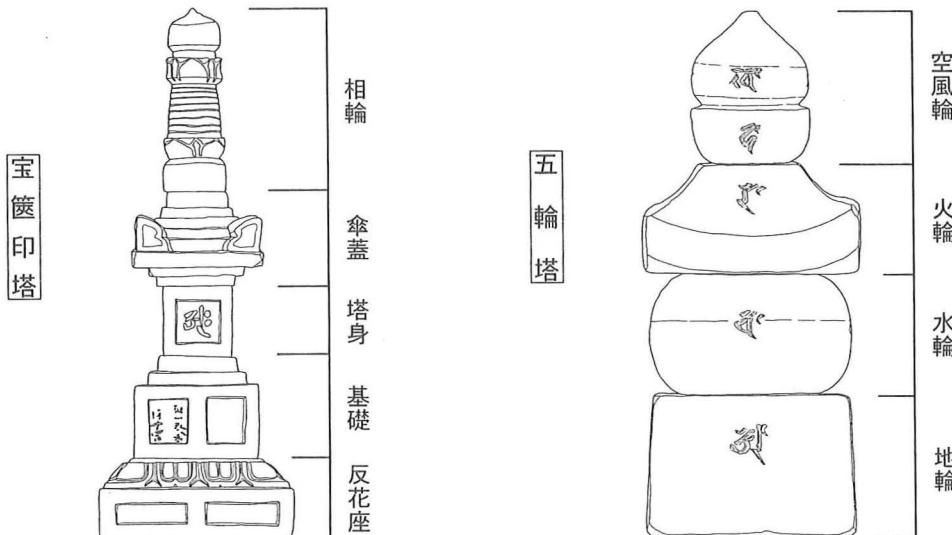
平成17年度以降刊行された報告書及び遺漏分については、これまで行ってきた基礎データの集成に加え、補遺として掲載した。

(松葉)

石塔類例言

1. 宝篋印塔・五輪塔の各部位の名称は第1図の表記に統一した。
2. 石材の表記は安山岩・凝灰岩に統一した。「伊豆石」は安山岩、「砂岩」「凝灰質砂岩」「鎌倉石」は凝灰岩とした。

石塔類



第1図 宝篋印塔・五輪塔の各部位の名称

(1) 宝篋印塔

これまでの発掘調査で宝篋印塔が出土している遺跡は、31遺跡51遺構を数え、総点数262点が出土している。なお、これら宝篋印塔の点数はやぐらの造営時期に伴うと考えられるものから、後世に投げ込まれたものと考えられるものまで含まれている。出土した262点中14点が凝灰岩製であり、やぐら出土の宝篋印塔はその多くが安山岩製といえる。

今回の分析は宝篋印塔の規模に着目し、各部位の高さと幅を計測した。計測にあたり、完形ではないが、欠損が僅かであり、データの集成にほぼ影響しないと考えられるものは、計測の対象とした。相輪と塔身に關しては、ほどを有しているものもあるが、高さには含めていない。なお、計測表の単位はcmである。

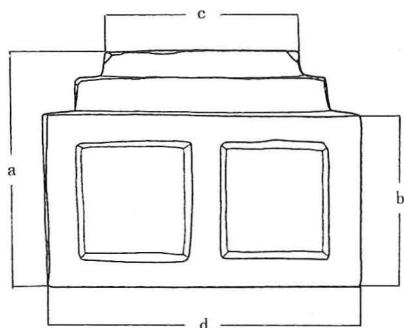
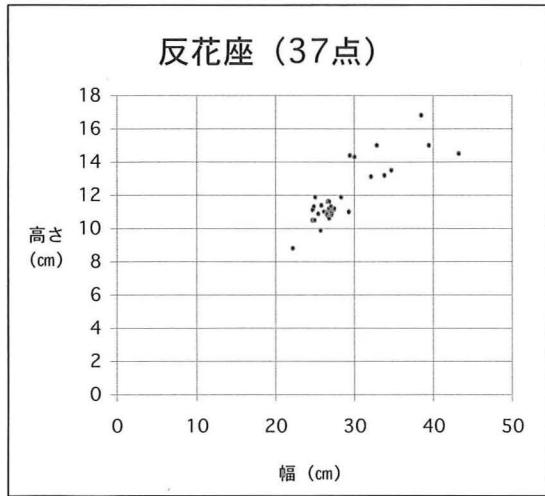
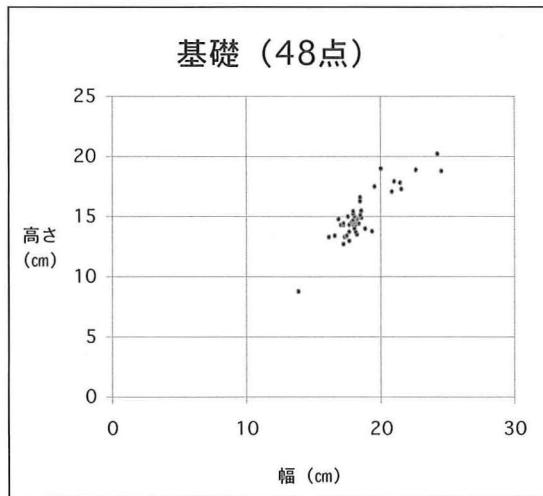
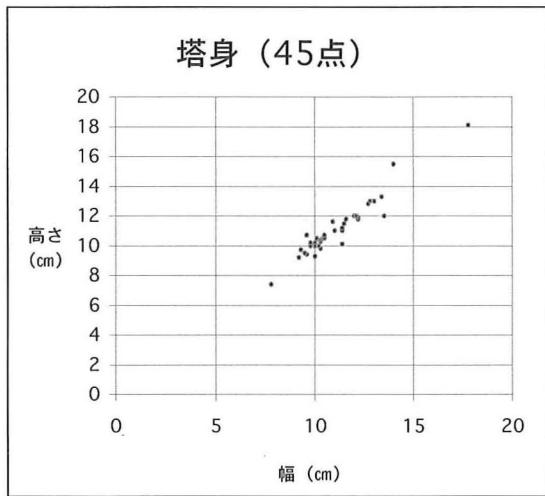
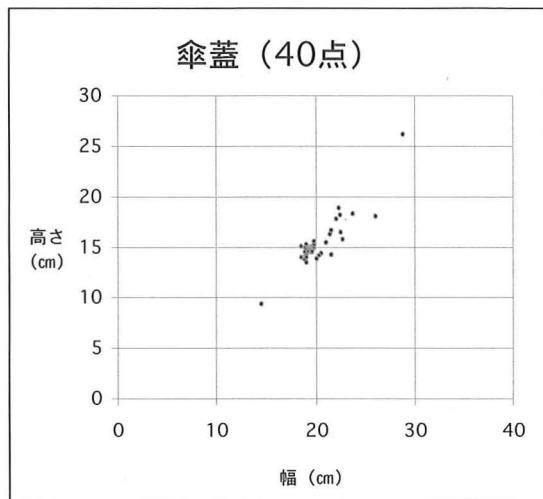
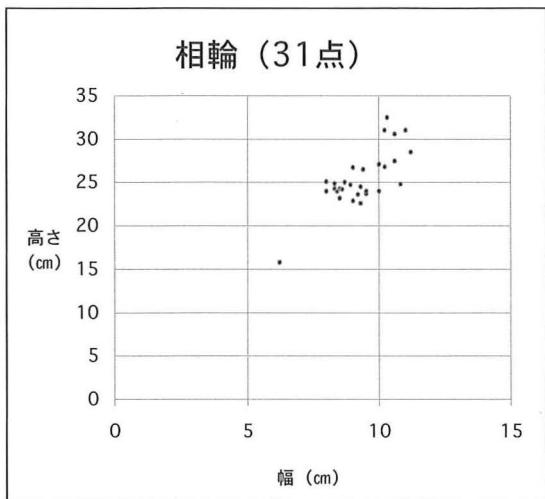
各部位(第2図)：各部位大きさは様々あるものの、いずれも小型宝篋印塔の部類に属すると考えられる。各部位の大きさは集中している範囲があり、その集中域から想定した宝篋印塔の総高は68~82cmとなる。おそらくやぐらに設置された宝篋印塔は、その多くが総高68~82cmの範囲に収まるものと推測される。各部位の比率(高さ÷幅)を算出すると、その平均値は相輪2.75、傘蓋0.76、塔身1.00、基礎0.81、反花座0.42となる。各部位のグラフからは、相輪にはややばらつきがあるものの、概ね一定した比率が看取される。以上から、やぐらに設置された宝篋印塔の多くは、小型で各部位の比率が定型化した段階の宝篋印塔と推測される。

基礎(第1表)：もう少し詳細に検討を行うため、紀年銘が刻まれている基礎を取り上げることにする。この分析ではより詳細な計測を行うため、凝灰岩製の基礎については風化が激しいことから、計測の対象から外した。やぐらから出土した紀年銘が刻まれている基礎は21個出土している。紀年銘は応安6年(1373)~永享12年(1440)までのものが見られる。形態はいずれも側面を輪郭にて二区に分け、上面は二段を有するといった特徴が見られる。從来からいわれている編年観(赤星1959、川勝1981、斎木1986)からすると、関東型式に属すると考えられ、鎌倉時代後期~室町時代に見られる形態である。つまり、基礎に関しては見た目の形態だけでは年代の判別がつかないといってよい。

紀年銘が刻まれている基礎21個に関して、a~dの値を計測し、比率算出(①~④)を行った。a~dの大きさについては、差が認められても4cmと、いずれも近似した計測値を示す。①~④の値の平均値は①0.81、②0.71、③0.65、④0.57となる。計測対象21個の多くがこれら平均値に近い数値を示す。これらの中では新

遺跡名	遺構	a	b	c	d	①a÷d	②b÷a	③c÷d	④b÷d	備考	文献
間口またやぐら群	4号やぐら	14.4	10.5	11.6	18	0.8	0.73	0.64	0.58	応安6年(1373)	宍戸・谷2004
新善光寺跡内やぐら	コ字区画遺構	14.3	10.3	12	17.6	0.81	0.72	0.68	0.59	明徳2年(1391)	原ほか1988
間口またやぐら群	4号やぐら	17.8	13	14.5	21.4	0.83	0.73	0.68	0.61	明徳3年(1392)	宍戸・谷2004
新善光寺跡内やぐら	コ字区画遺構	14.9	10.8	13.1	18.5	0.81	0.72	0.71	0.58	明徳3年(1392)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	コ字区画遺構	13.3	9.5	10.2	16.1	0.83	0.71	0.63	0.59	明徳4年(1393)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	コ字区画遺構	13.3	9.4	11.3	17.3	0.77	0.71	0.65	0.54	明徳5年(1394)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	コ字区画遺構	14	10.3	13	18.8	0.74	0.74	0.69	0.55	応永2年(1395)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	コ字区画遺構	12.7	10.1	11.4	17.2	0.74	0.8	0.66	0.59	応永2年(1395)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	コ字区画遺構	15.1	10.9	11.5	18.4	0.82	0.72	0.63	0.59	応永2年(1395)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	コ字区画遺構	14.3	10	11.3	17	0.84	0.7	0.66	0.59	応永2年(1395)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	コ字区画遺構	14.3	10.3	11.7	17.2	0.83	0.72	0.68	0.6	応永2年(1395)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	コ字区画遺構	15.2	10.3	11.3	17.9	0.85	0.68	0.63	0.58	応永2年(1395)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	コ字区画遺構	14.7	10.8	11.8	17.9	0.82	0.73	0.66	0.6	応永2年(1395)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	2号やぐら	14.3	10.3	11.6	18.1	0.79	0.72	0.64	0.57	応永8年(1401)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	コ字区画遺構	13.7	9.6	11	17.6	0.79	0.7	0.63	0.55	応永8年(1401)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	コ字区画遺構	14.5	10.4	11.8	18	0.81	0.72	0.66	0.58	応永8年(1401)	原ほか1988
長勝寺跡内やぐら	11号やぐら	14.9	10.3	11.7	18.1	0.82	0.69	0.65	0.57	応永20年(1413)	池田・宍戸2004
新善光寺跡内やぐら	コ字区画遺構	14.3	9.8	12.7	17.9	0.8	0.69	0.71	0.55	応永22年(1417)	原ほか1988
西御門やぐら群	7号やぐら周辺	14.5	10	11.5	17.8	0.81	0.69	0.65	0.56	応永29年(1422)	鎌木ほか2005
正法寺遺跡	表採	16.3	11.4	12.4	18.4	0.89	0.7	0.67	0.62	応永34年(1427)	宗臺ほか1999
上行寺東やぐら群	38号やぐら	15	10.7	10.1	17.5	0.86	0.71	0.58	0.61	永享12年(1440)	小林2002
安養院		74.4	58.9	66.1	98.2	0.77	0.79	0.67	0.6	徳治3年(1308)	文化財1980
覚園寺開山塔		77	60	70	100	0.77	0.78	0.7	0.6	正徳元年(1332)	伊原ほか1966
覚園寺大燈塔		77	61	68	97	0.79	0.79	0.7	0.63	正徳元年(1332)	伊原ほか1966

第1表 宝篋印塔基礎計測表



第2図 やぐら出土宝篋印塔規模

しいと考えられる上行寺東やぐら群出土の基礎と、正法寺遺跡出土の基礎はこの平均値からやや外れるが、紀年銘の示す南北朝後期～室町時代前期では基礎に関して、規模や型式がある程度定型化されていたことを示すものであろう。第1表では割愛したが、紀年銘がない21個に関しても、その多くは①～④の平均値に近い数値を示す。各部位の比率が一致していることは、製作時期や技術が近いといったことも指摘されている（山川2006）ことを勘案すると、紀年銘がない基礎に関して、その製作時期や技術は紀年銘が刻まれているものに近いものと推測される。逆に①～④の平均値からやや離れる基礎は、製作時期や技術が異なる可能性が考えられる。

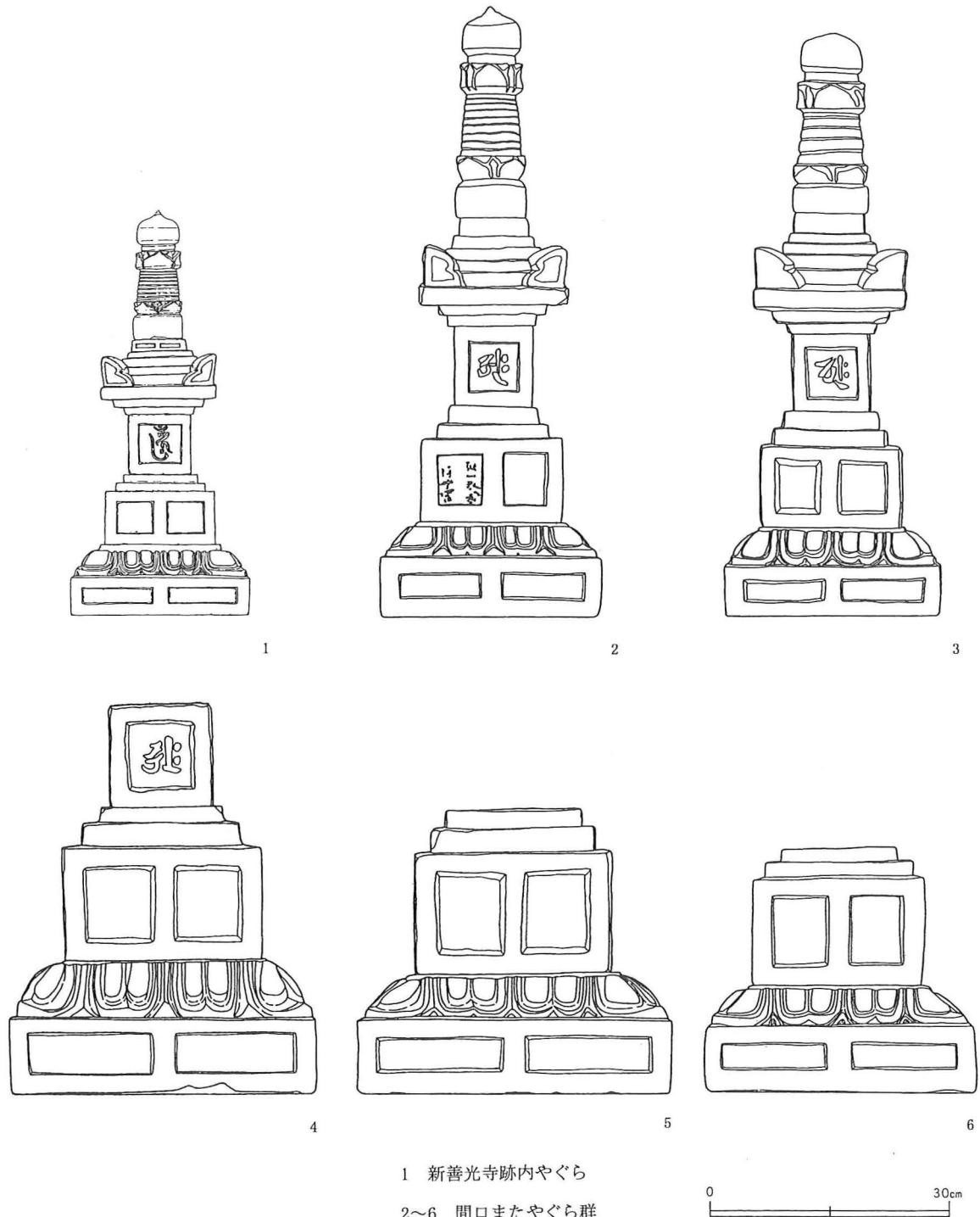
やぐらからの出土ではないが、鎌倉時代後期に大蔵派によって造立されたとされる3基の宝篋印塔について分析を加えることにする。安養院宝篋印塔は徳治3年（1308）、覺園寺開山塔・大燈塔は正慶元年（1332）の紀年銘が刻まれている。この3基の宝篋印塔は非常に大型で、基礎もやぐら出土の基礎に比べ非常に大きい。①～④の比率の中で、特に②の値がやぐら出土の基礎と大きく異なる点が特筆される。この時期の基礎は、基礎の高さ（a）に対して、側面高（b）の占める割合が高いといえそうである。

復元された宝篋印塔（第3図）：やぐらから出土した宝篋印塔で、組み合わせの復元が可能としているものは、反花座から相輪まで全て揃うものが3基、反花座・基礎・塔身が揃うものが1基、反花座・基礎が揃うものが2基報告されている。第3図1～3の宝篋印塔の形態を見てみると、反花座は側面を輪郭にて二区に分け、上端の反花は複弁二葉。基礎は側面を輪郭にて二区に分け、上部に二段を有する。塔身は輪郭を持ち、梵字が刻まれる。傘蓋は下二段上五段で最上段に露盤を有するものもあり、隅飾は二弧で輪郭を有するものもある。相輪は九輪が線刻で、宝珠がやや方形に近い形態を呈する。1～3は細部に異なる点は認められるものの、南北朝後期～室町時代前期の様相を呈する。2は基礎に応安6年（1373）の紀年銘が刻まれており、從来の編年観を裏付けるものである。

この1～3に注目すると、総高は1が50.2cm、2が76.3cm、3が74.1cmとなり、1はかなり小型となるが、2・3は前述した総高想定の62～82cmの範囲に収まるものとなる。相輪は1～3いずれも比率の平均値と異なっている。傘蓋から反花座にかけては、1は傘蓋と基礎が平均値と異なる数値を示し、2は概ね平均値と合致し、3は塔身以外概ね合致する結果となった。多くの数値で合致が見られる2・3は、やぐらから出土する多くの宝篋印塔がこの形態・規模であったと推測させる資料といえよう。1に関しては、規模・比率とも異なる点が多い。形態としては2・3と類似しているが、計測値から2・3とは異なる時期または技術で作成された可能性が高い。4～6は宝篋印塔の一部復元が可能であった例である。計測値・比率から、2・3と同様にやぐらから出土する多くの宝篋印塔と同様の形態・規模であると考えられる。

小結 やぐらから出土する宝篋印塔は、小型で関東型式に属するものと考えられ、これまでの年代観からすると、南北朝後期～室町時代前半に比定されるものが多い。関東型式は大蔵派宝篋印塔にその源流が求められ、規模に大きな差があったとしても、各部位の比率はさほど変わらないといった特徴がある（岡本2003）。やぐら出土の宝篋印塔も各部位の比率がほぼ変わらないといった傾向があり注目される。そのような中で、形態的には類似するが比率の平均値とは異なる宝篋印塔も見られ、これらはやぐらから出土する多くの宝篋印塔とは時期あるいは技術が異なると推測される。しかし、時期の前後関係や工人の技術の違いがあるのかまでは考察するに至っていない。また、鎌倉周辺の石塔造立の背景は多種多様であったことも指摘され（大三輪2006）、小型化する以前の背景も検討する必要がある。今後の課題として次に繋げたい。

(松葉)



1 新善光寺跡内やぐら

2~6 間口またやぐら群

0 30cm

	相輪			傘蓋			塔身			基礎			反花座			備考
	高さ	幅	高÷幅	高さ	幅	高÷幅	高さ	幅	高÷幅	高さ	幅	高÷幅	高さ	幅	高÷幅	
1	15.8	6.2	2.55	9.4	14.5	0.65	7.4	7.8	0.95	8.8	13.8	0.64	8.8	22.2	0.4	
2	26.7	9	2.97	13.5	19	0.71	9.8	10.3	0.95	14.4	18	0.8	11.9	28.3	0.42	応安6年(1373)
3	22.6	9.3	2.43	14.8	19	0.78	10.7	9.6	1.11	14.4	17.2	0.84	11.6	26.6	0.44	
4							13	12.8	1.02	18.8	24.5	0.78	16.8	38.5	0.44	
5										20.2	24.2	0.83	15	39.4	0.38	
6										17.8	21.4	0.83	13.2	33.8	0.39	明徳3年(1392)

第3図 やぐら出土宝篋印塔復元図

(2) 五輪塔

やぐらから出土した五輪塔は、2005年の集成で1,948点の出土がみられていたが、その後の出土事例の増加により、62遺跡から総点数2,211基及び一石五輪塔8基の出土を確認している。しかしながら、前項の宝篋印塔と同じく出土状態には大きな差異が認められ、やぐらが機能していた時期に直接関わるものは少なく、多くは後世の投げ込み等によるものとみられる。ここでは紙幅の関係上、出土した五輪塔の石材別部位ごとの法量比較、出土状況等、一石五輪塔に絞って概観してみたい。なお、分析の都合上、完形及び欠損の少ないものを対象にし、著しいものなどについては除外している。よって総出土数と法量分布図に用いた基数は一致していないことをあらかじめ断わっておきたい。なお計測表の数値はcmで統一している。

五輪塔法量比較：やぐら出土の石塔類は、五輪塔2,211基(84%)、一石五輪塔8基(1%未満)、宝篋印塔262基(10%)、板碑166基(6%)とその多くを五輪塔が占めている。五輪塔が、他の石塔類に比してこれほどの数量差を誇ることについては、やぐらに葬られた被葬者層及びその宗派など多くの視点から考える必要がある。そのため、今回明確な答えを出すことはできないが、少なくともやぐら内に安置する石塔類では五輪塔がその主流であったのだろう。五輪塔には、大きく分けて凝灰岩製と安山岩製の2種による石材を用いて作成されている。凝灰岩は鎌倉や三浦半島周辺など比較的近隣で切り出せるのに対し、安山岩は箱根・伊豆周辺といった遠隔地に産地が求められる。数量的には、凝灰岩製1,200基、安山岩製1,011基と拮抗しているが、わずかに凝灰岩製五輪塔が上回っている。以下個別に法量等の観察に移る。

凝灰岩製五輪塔(第4・5図)：空風輪264基、火輪228基、水輪303基、地輪405基が出土し、中でも地輪の出土数が他の部位に比べて多い。法量分布を見ると、空風輪は高さ20cm、幅10~20cm周辺に集中して分布がみられ、火・水・地輪については、高さ10~30cm、幅20~40cmの位置に点が集中する傾向を示す。しかし、逆に点のバラつきも多くみられ、やや細長い線状にドットが散らばる点も見受けられる。極端にいえば、非常に小さなものから巨大なものまで千差万別に作成されているとみえる。想像を逞しくすれば、これは各部位の法量が一定化しつつあるものの、法量の自由度が高い点から、定型化への移行期とみることも可能かと考える。

安山岩製五輪塔(第6・7図)：安山岩製では空風輪270基、火輪280基、水輪243基、地輪218基と凝灰岩とは逆に地輪の確認数が部位の中で最も少ないという結果になった。それぞれの法量分布では、空風輪は高さ15~25cmと10~15cmで幅10~20cmの位置で点が集中し分布が二極化する傾向が見て取れる。以下、他の部位についても、火輪・水輪は高さ15~25cm及び5~15cm、幅10~30cmの位置に二つの集中個所があり、地輪は他の3つの部位より二極化は大きくないものの、高さ10~25cm、幅10~30cmの集中個所にやや割れる箇所を見る能够である。全体的には、点が大きくは広がらず、二極化するものの同じ個所に集中するといった様子が伺える。これは五輪塔としての形態が定型化へさらに進んだ結果といえようか。

これらの法量分布から凝灰岩製と安山岩製五輪塔では、個々の形態ではその法量に大きな差は見られないものの、全体の傾向を勘案すると明確な差異があることが判明した。凝灰岩製では、法量の集中と分散がみられ、安山岩製では点の更なる集中と二極化がみられている。これは、安山岩製五輪塔がより定型化に近づいているという見方ができないだろうか。これまで五輪塔は凝灰岩製のものが先行して現れ、安山岩製の五輪塔は後出という凝灰岩(13世紀後半~14世紀後半主体)から安山岩(14世紀後半以降主体)への石材変化が時代的なものとして考えられている。これは、鎌倉市葛原岡やぐら群出土の凝灰岩製地輪に正和五年(1316)の銘があり、これがやぐら出土五輪塔では最古の銘であることや、番場ヶ谷13号やぐら出土の元徳三年

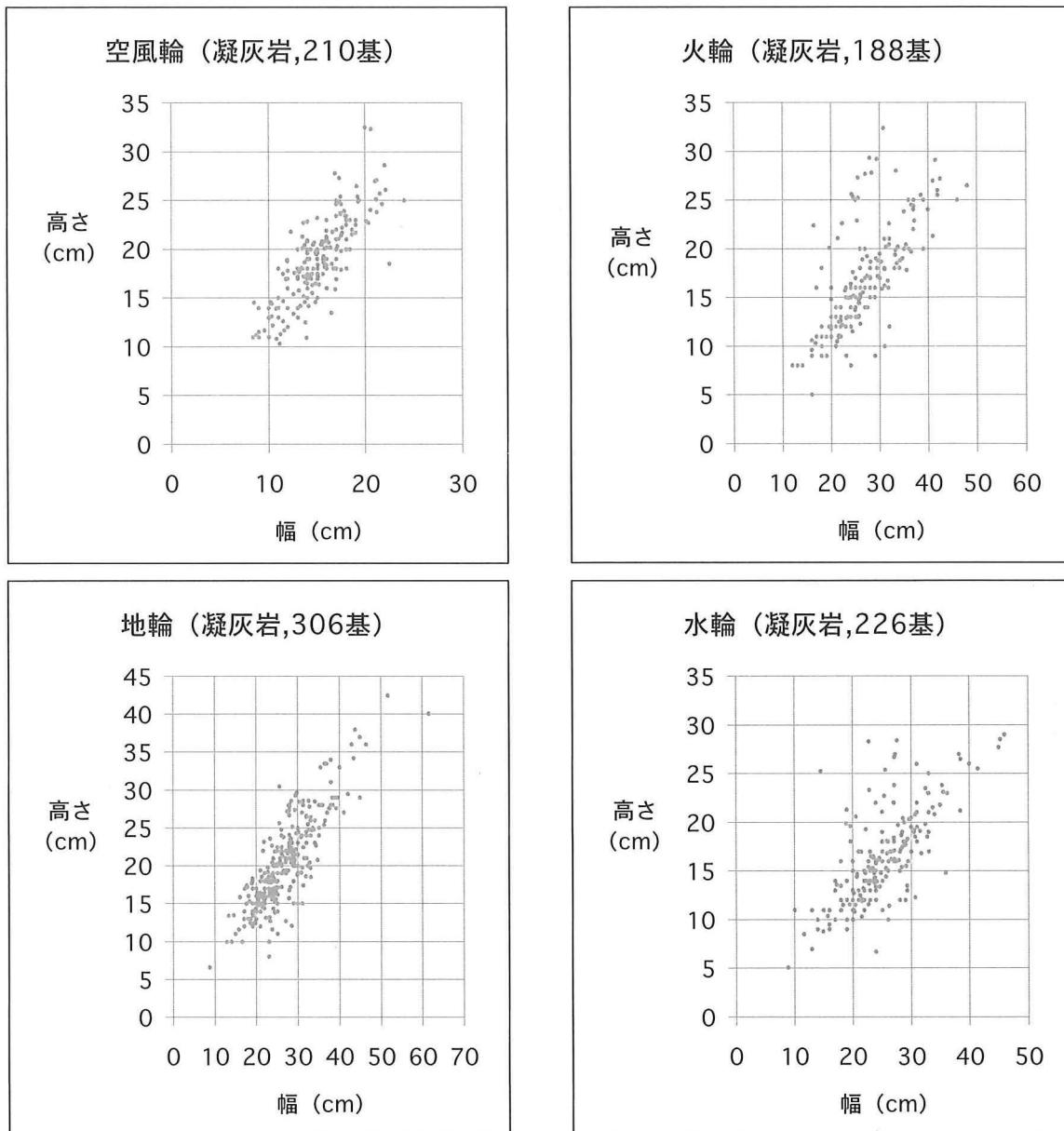
(1331) 銘の地輪や多宝寺19号やぐらから出土した嘉暦二年(1327)銘地輪、天神やぐら群五号穴出土歎三年(1340)を刻む地輪といった後出の紀年銘をもつ五輪塔が安山岩製であるといった点からも伺える。凝灰岩は安山岩よりも風化の度合いが強く、銘文等が確認されにくいといった点があるものの、今回の法量分布で確認された傾向は、これまでいわれてきた石材変化の様相を補強するものとみられる。また、凝灰岩製、安山岩製ともに著しく法量が異なる製品もみられるため、その時代差や技術差についても検討が必要であろう。

五輪塔出土状況(第8図)：やぐら内からは様々な状況で五輪塔の出土が確認されている。覆土中や床面から数点出土がみられる場合が多いが、やぐら造営期に安置されたと推測される形で出土する五輪塔も少なくない。ここではいくつかの出土例を概観し、今後の検討の材料としたい。

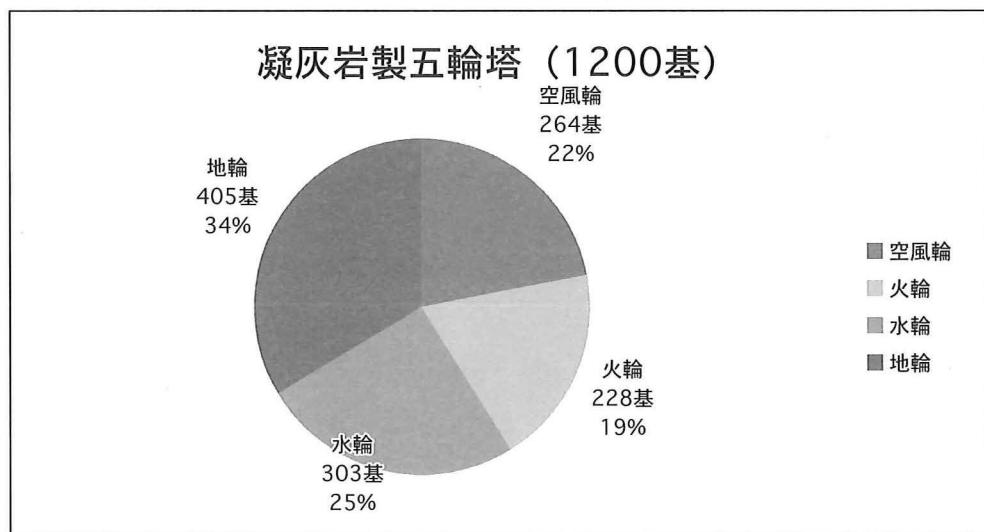
1. 大倉幕府北やぐら群5号やぐら(第8図1)：奥壁・側壁沿いに棚状の壇を設け、2基の五輪塔(火・水・地輪が床面に据えられ、空風輪は落下していた)が壇上に供えられていた。五輪塔は左右で大きさが異なり、東側に置かれた五輪塔がやや小さい。五輪塔下に玉石や切石が敷かれていた形跡は認められない。13世紀後半～14世紀初頭頃のものと考えられ、共に凝灰岩製である(鈴木2004)。
2. 多宝寺址やぐら群(第8図2)：奥壁沿いに大型の五輪塔を2基配置し、前方に小型の五輪塔を配置する。2号やぐらや床面に切石を敷いた基壇上に五輪塔を置き、さらに周囲に小型の五輪塔を配する10号やぐらなどが検出されている(学習院大学輔仁会史学部1966)。
3. 亀ヶ淵やぐら群・理智光寺谷やぐら(第8図3)：床面を掘り窪めて蔵骨器としての常滑甕を埋納している。また切石を蓋としてその上に五輪塔を安置する。蓋石の上に五輪塔を1基配する例(理智光寺やぐら)やその周囲にさらに五輪塔を並べる例(亀ヶ淵やぐら群)がある。また、亀ヶ淵やぐら3号穴のように宝篋印塔を中心に据えているやぐらも存在する。逆に弁ヶ谷東やぐら群や瀬戸町やぐら群のように蓋石はあるものの、上に石塔が確認されないやぐらもみつかっている。蔵骨器に納められた被葬者には上級僧侶などが推定されている(鈴木2000)。

これらの例からは、ある1基、もしくは2基の中心的な五輪塔が存在し、その周囲に小型の五輪塔を配する様相が見て取れ、被葬者階級によってはやぐら内に納骨穴を設け火葬骨を納めるだけでなく、蔵骨器を伴う状況も看取できる。また、基壇状に安置する場合や床面直上に据えるものもある。こういった配置や石塔の大きさの違いは、被葬者階級やその結縁者集団によっても左右されるであろうし、時代性によるものでもあるとみられる。また、五輪塔に限らず、宝篋印塔との差別化がどのように図られていたのかについても出土状況から検証することが今後必要であろう。ここに示した出土事例はごく一部であり、これらのみをもって考察を進めることは危険である。むしろ、やぐら内に石塔が1基もない場合や後世になって大量に並べ置かれた例(正覚寺やぐら群など、逗子市2007)も多いことから石塔の設置されるやぐらや設置されないやぐらのあり方についても五輪塔の意味合いと同じく追及しなければならないだろう。

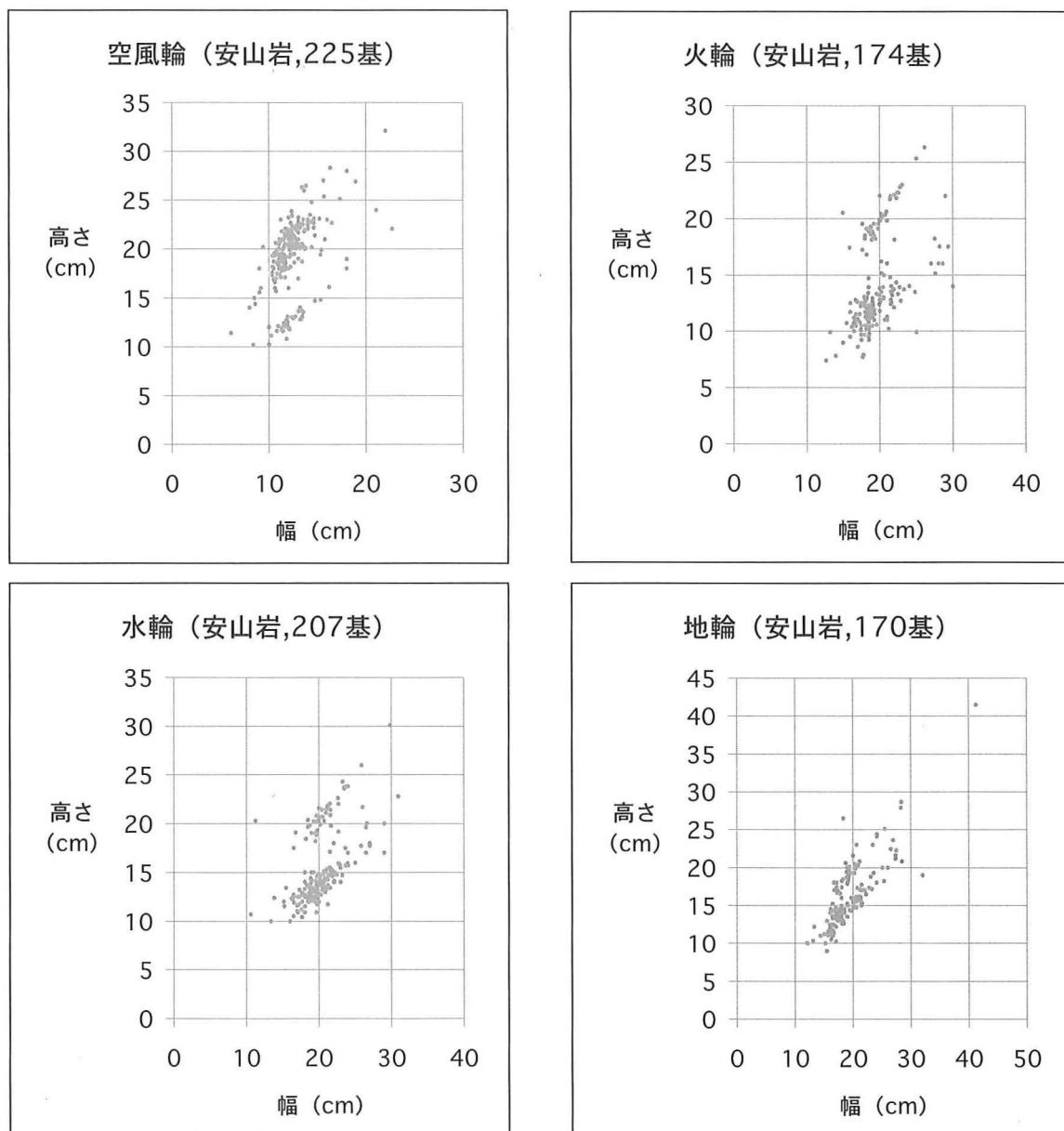
一石五輪塔：最後に、一石五輪塔について簡単ではあるが触れておく。一石五輪塔は、空風・火・水・地輪の各部位を一石で作り出したもので、主に全体的に小型で中世後期から近世期にかけて大量に造立されたものとされている。主に西日本で分布が確認されているが、東日本でも青森県や山形県、茨城県・千葉県などで出土がみられている(石造物研究会2007)。神奈川県内でやぐら内から出土した一石五輪塔は、極楽寺旧境内北やぐら、正禪寺やぐら群、薬王寺やぐら群、間口またやぐら群、宅間谷やぐら群などから8基が確認されている。極楽寺旧境内北やぐら出土のものが安山岩である以外はすべて凝灰岩製である。また、傾向として、紀年銘などは確認されていないことや空風～地輪すべてが一石で揃ってはおらず、火・水輪や火輪



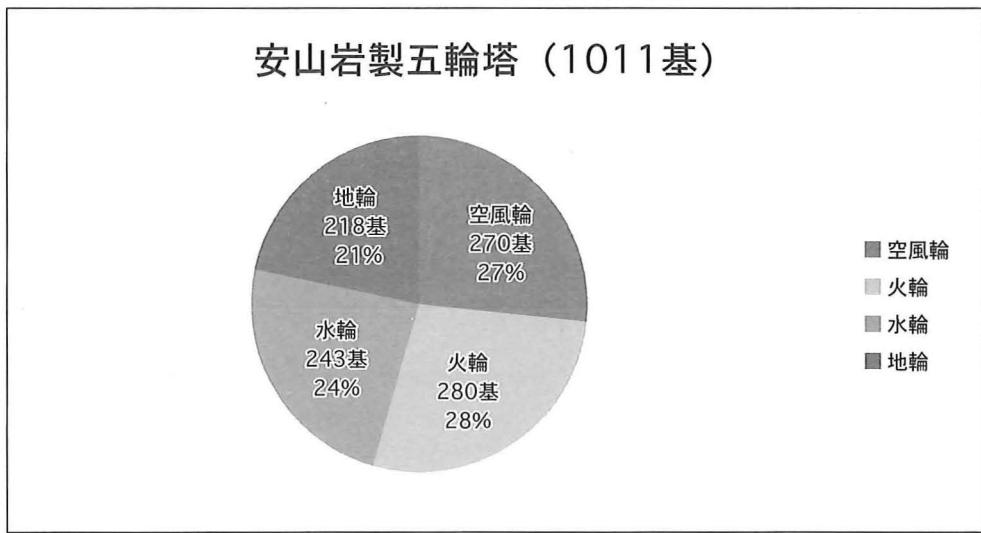
第4図 凝灰岩製五輪塔部位別法量散布



第5図 凝灰岩製五輪塔出土割合



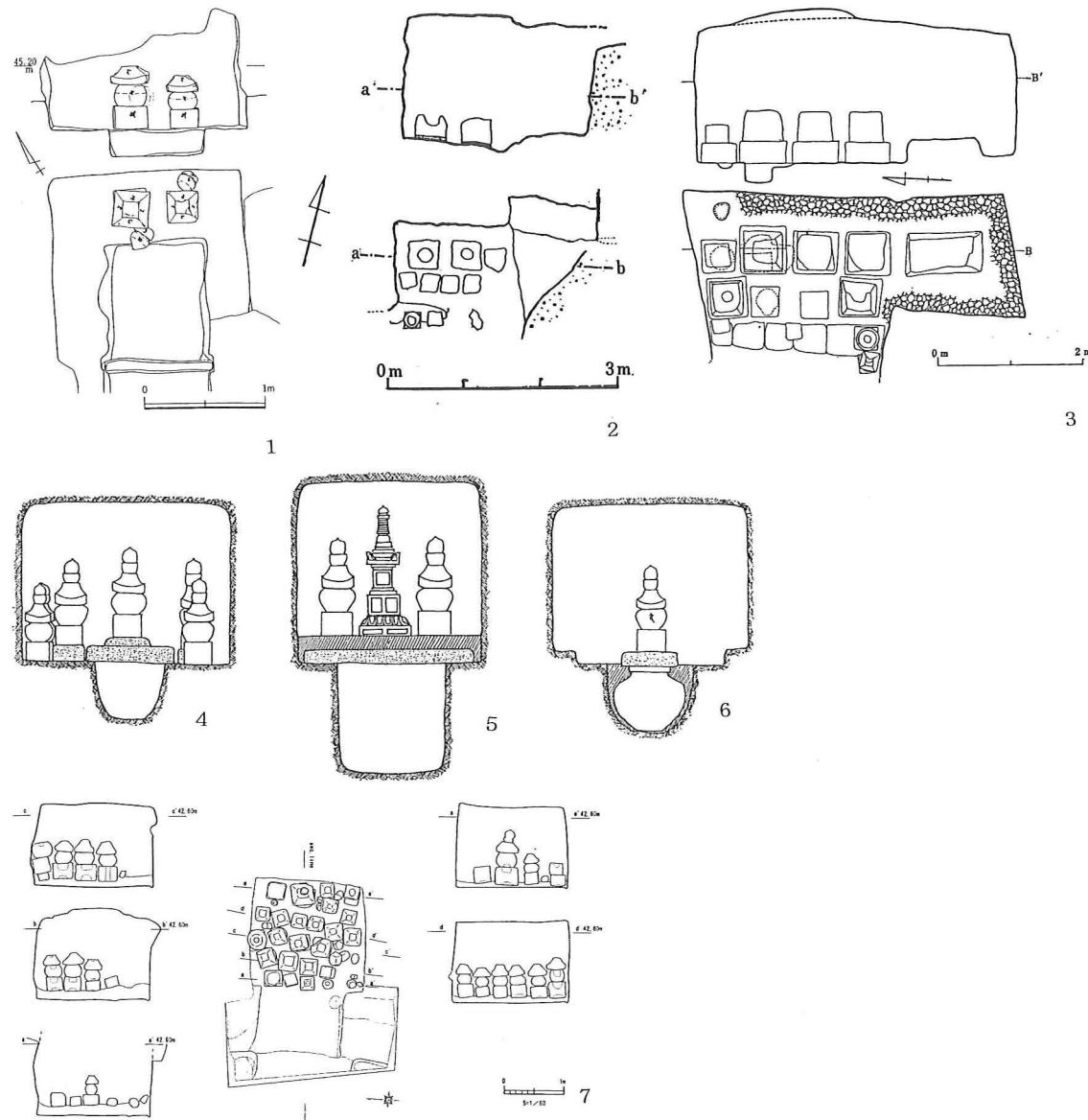
第6図 安山岩製五輪塔部位別法量散布



第7図 安山岩製五輪塔出土割合

～地輪など五輪塔の部位の一部が一石で作られていることが特徴といえる。やぐらの造営時期や多くが凝灰岩製である点を考えると、従来の一石五輪塔の年代観より遡る可能性があるが、紀年銘が確認されていないことや数量の少なさから断定するには危険であり、詳細な検討が必要であろう。これら一石五輪塔とその他の五輪塔、ひいてはやぐら出土の石塔類との関係性やその時代性等については今後の課題としておきたい。

(吉田)



1、大倉幕府北やぐら群5号やぐら 2、多宝寺址やぐら群2号やぐら 3、多宝寺址やぐら群10号やぐら
4、亀ヶ淵やぐら1号やぐら 5、亀ヶ淵やぐら3号やぐら 6、理智光寺谷やぐら 7、正覚寺やぐら群

第8図 やぐら内五輪塔出土例

(3) 板碑

現在やぐらから出土している板碑は、8遺跡から破片を含めて166点が確認できる。以下、概要について述べる。

1. 駒岡遺跡A地点：丘陵の西側斜面に穿たれた3基の横穴転用の中世墓。A-1号横穴の羨門部から玄室方向へ両側壁に沿って小型板碑列が確認される。玄室床面には主軸線に沿った細い溝と、直交方向にいくつかの窪みがあり、一部に板碑基部が残存。A-2号横穴では、玄室内に板碑片10数枚を井桁状に組み、中央に人骨、獣骨を埋納。この上に宝篋印塔部材を方形に固めて置く。板碑は、断片を含め70点余りが出土している。そのうち45点の板碑の表面には、主尊種子三尊・キリーグ、月輪、蓮台、花瓶が確認され、刻線・刻字に金泥が施された板碑も13点が確認される。その他、紀年名も「応永」「嘉吉」「長禄」「寛正」「文明」「文安」「享徳」「宝徳」の年号が確認されており、年代で見ると応永3年(1396)～文明16年(1482)の約100年間にわたる年号が刻まれている。(井上1972a)

2. 長昌寺前横穴群(第9図1・2)：5基の横穴群の西側に、傾斜面を隅丸長方形に削り込み、3基の五輪塔を据えた遺構を検出。下方には五輪塔部材が散乱し、径5cmほどの円礫が数個ずつのまとまりとして見られた。付近の崩落土中から板碑片が5点出土している。1点は、上部及び基部を欠く大型の板碑で、表面に蓮台と年月日の刻字の痕跡が認められる。1点は上半部を欠損する板碑で、上方左右に1体ずつの花瓶と「□文六年十月□」の年号が刻まれている。また、刻線・刻字には金泥で化粧した痕跡が認められる。(井上1972b)

3. 上行寺東やぐら群(第9図3～6)：昭和59年(1984)8月～12月及び昭和61年(1986)7月～12月の2年にわたりて発掘調査が実施された。調査によって、上中下三段にわたりてやぐら44基、掘立柱建物址10棟、礎石建物址などが発見された。13・17・22号やぐら内より板碑が5点出土している。13号やぐらはから、1点が出土している。長さ50cm、最大幅約15cmを測る。表面は、風化が激しく主尊種子キリーグ下端部が痕跡をとどめる。18号やぐらはから、3点が出土している。風化が激しく、表裏ともに剥落が激しく紀年名・願文・供養者名等は確認できない。いずれも、やぐら機能時の現位置を保って出土した。22号やぐらは1点が出土している。残存長約24cm、幅約20cmを測る。下端部が欠損しているが、蓮座上部に主尊種子キリーグ下端部が残存する。(小林2002)

4. 六浦大道やぐら群：六浦湊の最奥部に位置する。平成6年(1994)と翌7年に、15基のやぐら、やぐらを転用遺構3ヶ所が調査された(鹿島・鈴木1997)。出土遺物は、一部のかわらけを除き15世紀中頃から16世紀前半のものが大半を占める。全体的に遺存状態が悪い。1号やぐらからは多量の五輪等を主として石塔類が出土しており、板碑も多数が出土している。1号やぐらから33点が、2号やぐらから1点、8号やぐらから14点、12号やぐらから1点が出土しているが、いずれも破片であり表面の風化が多くみられる。また、2号防空壕から3点の板碑が出土しているが、9号やぐらに納められていたものと考えられる。(鹿島1997)

5. 川名森久地区遺跡群(第9図7～9)：西側斜面やぐら群の2基より板碑が多数出土した。1号やぐら4点、2号やぐらから28点が出土している。板碑の残存状態は比較的よく、完形もしくは完形に近い物がほとんどである。多くの板碑の表面には、二条線、上部中央には主尊種子キリーグ、花瓶が確認される。また、紀年銘も確認され「正中年(1324～1326)七月」「応永七(1400)」「応永九(1402)」「応永十二(1405)」「応永十八(1411)」「十二」「十二、六」「十四年」「五月日」等が確認される。1号やぐらから出土した「正中年七月」と記された板碑(第9図7)は奥壁そばに正面を北に向かって直立して発見された。2号やぐらから出土し



第9図 やぐら内出土板牌 [1/8]

た板碑は、やぐらの拡張された部分に集中し横位で出土した。(渡辺1996)

6. 間口またやぐら群（第9図10）：やぐら5基が発見された。4号やぐらの玄室奥右側の床面が一段低くなり納骨穴が造られている。やぐら内の床面に摩滅した貝殻を主体とした白い砂が堆積。1号やぐらから1点、2号やぐらから下半部1点が出土。その他、かわらけが出土。1号やぐらには、奥壁に沿って小さな溝状の掘り込みが確認されており、この上部に立てられた状態で板碑が出土している。(宍戸2004)

7. 長勝寺跡内やぐら群（第9図11）：やぐら19基が発見された。大部分のやぐらは斜面の崩壊や開削により前庭部、羨道部などの入り口部は確認できなかった。1号やぐらから1点、11号やぐらから4点、13号やぐらから1点の計6点が出土している。11号及び13号やぐらから出土した板碑は共に上半部のみの出土だが、共に種子・蓮台が確認できる。その他の板碑は破片である。(長谷川・大塚1999b、池田・宍戸2004)

8. 松谷寺やぐら：やぐら13基が発見された。谷戸内のL字状崖面に展開し、その前面には建物址の存在が推測される岩盤削平の平場の一部が検出された。2号やぐらから2点が出土している。2点共に下半部のみの出土で表面にノミ状工具痕が残る。(宗臺1998)

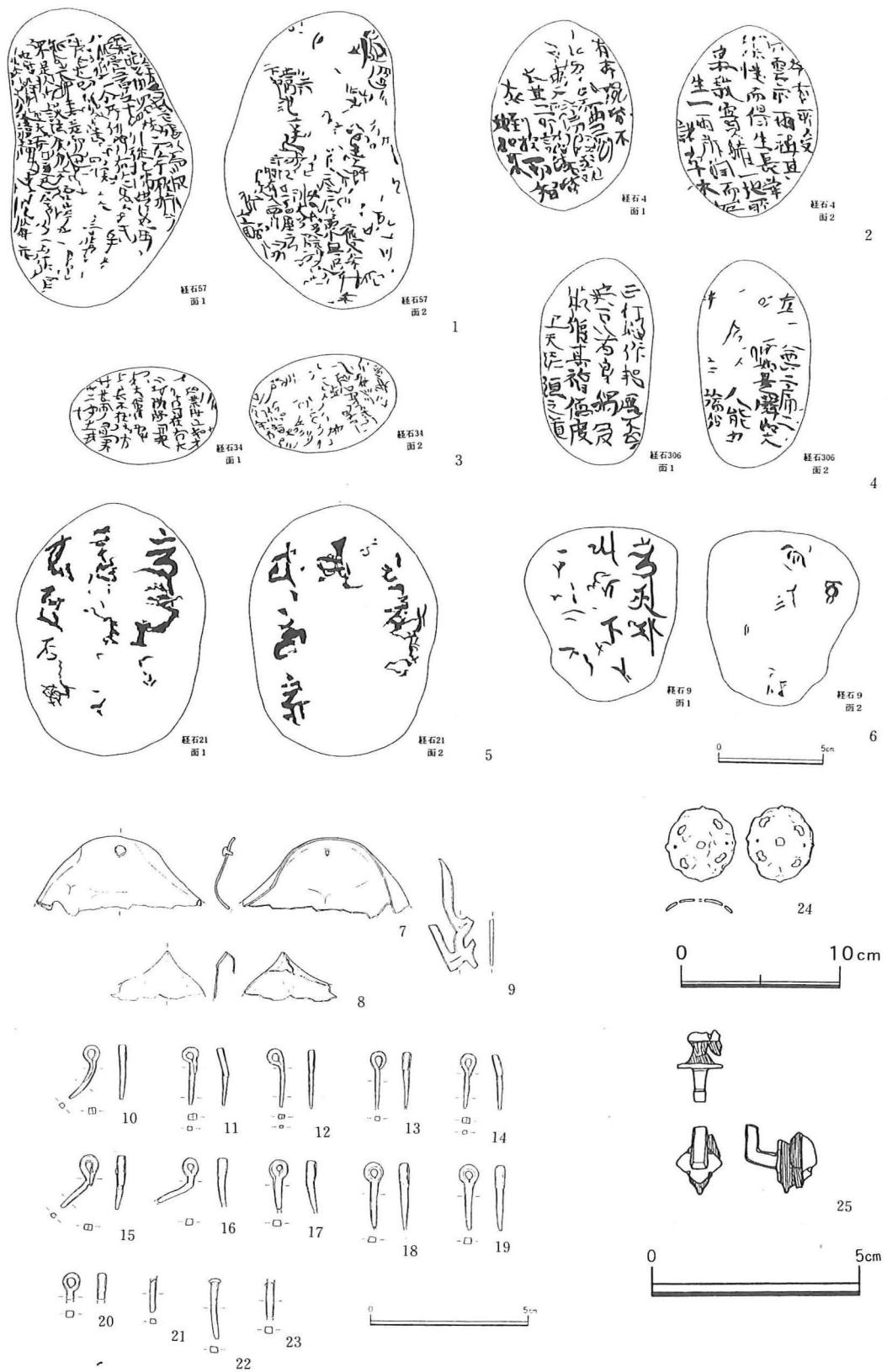
以上が、板碑が出土したやぐらの概要である。板碑は現時点で166点が出土しているおり、五輪塔や宝篋印塔等を合わせた全石塔出土点数2,639点中の約7%にすぎない。出土数では、五輪塔や宝篋印塔に比べると圧倒的に数が少ない。また、今回集成した物は半分以上のものが破片であり、完形もしくは1/2以上残存している板碑は90点弱である。出土状況については、ほとんどの板碑がやぐら内に投げ込まれたり放置された状態で出土しており、立てられた状態で出土している物は数点にすぎない。前述のとおり、川名森久地区遺跡群1号やぐらでは、奥壁そばに正面を北に向け直立して、また間口またやぐら群1号やぐらでは、奥壁に沿って小さな溝状の掘り込みの上部に立てられて状態で板碑が出土している。やぐら内に、板碑を伴う形で埋葬が実施された例と考えられる。

板碑は、これまでの研究により13世紀以後に出現し、16世紀には減少し、17世紀には姿を消していく様子がうかがえる。やぐら内より出土した板碑については、やぐら自体の構築年代がはっきりしていないことから確実なことは言えないが、紀年名が確認される物が14・15世紀に限られることから、ほぼこれと同じ状況にあったと考えられる。

(4) その他の遺物

やぐら内より出土した陶磁器、かわらけ、石塔類以外の遺物には、瓦質器、砥石、銅錢、滑石製鍋、鉄製品、銅製品、木製品、石製品など多種多様の遺物が出土している。大部分の遺物については、やぐらでの葬送に関係する遺物と言うよりは、やぐら前面に展開すると考えられる造成遺構や周辺からやぐら内に混入された遺物と考えられる。その中でも、やぐらへの埋葬に関係すると考えられる遺物について述べてみたい。

まず、山王堂東谷やぐら群から出土した経石（第10図1～6）があげられる。山王堂東谷やぐら群は、鎌倉市大町に所在し、2001年～2004年にかけて11基のやぐらが調査された。その中で、1号やぐらと3号やぐらから経石が出土している。1号やぐらでは、玄室内中央部に直方体の切石9個を組み合わせた基壇が設けられ、基壇とその周辺より玉石1,426点が出土し、その内150点より経石が認められた。また、前庭部の集石より玉石209点が出土し、その内32点より経石が認められた。3号やぐらでは、玄室内から玉石1,320点が出土し、その内1点より経石が認められた。また、前庭部より玉石109点が出土し、その内15点より経石が認められた。やぐら群からは、合計199個の経石が出土している。経石は、いずれも「多字一石経」と呼ばれ



1~23: 山王堂東谷やぐら群、24: 尾藤谷やぐら群、25: 宅間谷西第2やぐら群

第10図 やぐら内出土経石・銅製品 [1/3 · 1/1 · 1/4 · 2/3]

る物で、石の前面にわたって経文が確認できる。経石が出土したやぐらは、山王堂東谷やぐら群以外に、多宝寺跡やぐら群（奥田1966、三上1976）、新善光寺跡やぐら群（原1988）、まんだら堂やぐら群、名越山やぐら、葛原岡やぐら群、瑞泉寺裏山やぐら群、釈迦堂奥やぐら群（赤星1957）の7地点が確認されている。これまでやぐらから発見された経石は、石の表面に記された「法華經」が記されているが、山王堂で出土した経石は、「佛說無量壽經」が記されており初めての出土である。「佛說無量壽經」は浄土系の宗派と強い結びつきを有する教典で、供養に当たっての宗教的背景を考えていく上で興味深い例であると報告されている。

経石以外では、同じく山王堂東谷やぐらの前庭部より、懸仏の光背もしくは鏡板と思われる銅製円板、火焔様衣装をなす銅板、銅製壺金や銅釘等（第10図7～23）が出土している。やぐら内より出土した銅製品は、尾藤谷やぐら群（長谷川・大塚a1999）より飾金具（第10図24）、宅間谷西第2やぐら群（宍戸2001）より座金付鉤（第10図25）が確認できる。銅製が、やぐら内より出土することは数量的には非常に少ないが、懸仏の光背、鏡板、飾金具等、葬送儀礼に関係する遺物と考えられる。

(宮坂)

〔参考文献〕

- 赤星直忠 1957『鎌倉の経塚』『考古学雑誌』42-4 日本考古学会
 赤星直忠 1959『鎌倉市史』考古編
 池田治・井辺一徳・宍戸信悟 2001『山王堂東谷やぐら群』かながわ考古学財団調査報告117
 池田治・宍戸信悟 2004『長勝寺跡内やぐら群II』かながわ考古学財団調査報告174
 池上悟 1993「下総型宝篋印塔について」『立正大学人文科学研究所年報』第31号 立正大学人文科学研究所
 石田茂作 1969『日本佛塔の研究』講談社
 井上義弘 1972a『昭和46年度横浜市埋蔵文化財調査報告書』
 「横浜市鶴見区駒岡遺跡群調査報告」横浜市埋蔵文化財調査委員会
 井上義弘 1972b『昭和46年度横浜市埋蔵文化財調査報告書III』
 「横浜市金沢区富岡町長昌寺前横穴群発掘調査報告」横浜市埋蔵文化財調査委員会
 伊原恵司ほか編 1966『重要文化財覚園寺開山塔・大燈塔修理工事報告書』覚園寺
 上田薫・植山英史 2000『釜利谷東6丁目西地区やぐら群（2次）』かながわ考古学財団調査報告107
 大三輪龍哉 2006「中世東国における石製塔婆の研究－中世都市鎌倉の宝篋印塔と五輪塔を中心として－」
 『考古学論究』第11号 立正大学考古学会
 岡野智子 2003『大藏派宝篋印塔の研究』『戒律文化』2
 岡野智子 2006『初期宝篋印塔と律宗』『戒律文化』5
 奥田直栄他 1966『中世墳墓「やぐら」の調査』学習院大学輔仁会史学部
 鹿島保宏・鈴木重信 1997『六浦大道やぐら群発掘調査報告書』財団法人横浜市ふるさと歴史財団
 川勝政太郎 1981『石造美術』誠文堂新光社
 小林義典 2002『上行寺東やぐら群遺跡発掘調査報告書』上行寺東やぐら群遺跡発掘調査団
 斎木勝 1986『関東式宝篋印塔の研究』『千葉県文化財センター研究紀要』10 財団法人千葉県文化財センター
 坂詰秀一編 1985『板碑研究入門』『考古学ライブラリー』12 ニュー・サイエンス社
 坂詰秀一 2006『坂詰秀一先生石造文化財論叢（再録）』『石造文化財』2 佛教石造文化財研究所
 佐藤亞聖 2007「中国宝篋印塔の編年について」『中日石造物の技術的交流に関する基礎的研究－宝篋印塔を中心に－』
 シルクロード学研究vol.27 シルクロード学研究センター
 宮戸信悟・池田治 2001『宅間谷西第2やぐら群』かながわ考古学財団調査報告114
 宮戸信悟 2004『間口またやぐら群』かながわ考古学財団調査報告172
 宗臺富貴子・宗臺秀明・田代郁夫 1998「松谷寺やぐら」『中世石窟遺構の調査II』
 東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集 東国歴史考古学研究所
 宗臺秀明ほか 1999「正法寺遺跡」『中世石窟遺構の調査III』東国歴史調査研究所調査研究報告第22集 東国歴史考古学研究所
 鈴木庸一郎・木村吉行 2000『弁ヶ谷東やぐら群』かながわ考古学財団調査報告94
 鈴木庸一郎・岩田直樹・根本志保 2005『西御門東やぐら群』かながわ考古学財団調査報告181
 鈴木庸一郎・西谷俊廣 2007『宅間谷東やぐら群』かながわ考古学財団調査報告207
 逗子市教育委員会 2007『埋蔵文化財緊急調査報告書5—平成15年度・平成16年度・平成17年度—』
 石造物研究会 2007『日引 一石五輪塔の諸問題』第9号
 千々和実 1984「板碑」『仏教考古学講座』第三巻塔・塔婆 雄山閣
 千々和実 1984『板碑源流考』吉川弘文館
 貴達人 1978『鎌倉の宝篋印塔』鎌倉国宝館図録第22集 鎌倉国宝館
 長谷川厚・大塚健一a 1999『尾藤谷やぐら群』かながわ考古学財団調査報告64
 長谷川厚・大塚健一b 1999『長勝寺跡所在やぐら群』かながわ考古学財団調査報告71
 原廣志ほか 1988『新善光寺跡やぐら発掘調査報告書』新善光寺跡やぐら発掘調査団
 文化財建造保存技術協会編 1980『重要文化財安養院宝篋印塔保存修理工事報告書』安養院
 三上次男他 1976『多宝律寺遺跡発掘調査報告書』多宝律寺遺跡発掘調査団
 山川均 2006『石造物が語る中世職能集団』日本史リブレット29 山川出版社
 山本暉久・植山英史ほか 1997『池子遺跡群IV』かながわ考古学財団調査報告26
 渡辺清史 1996『藤沢市川名森久地区埋蔵文化財発掘調査報告書II』飛島建設株式会社・川名森久地区遺跡発掘調査団

第2表 神奈川県内「やぐら」集成追加・補遺一覧（2005年12月以降刊行分）

番号	遺跡名	所在地	基数	立地	調査年月日	備考	文献番号
52	無量寺ヶ谷やぐら群	鎌倉市扇ヶ谷1丁目26番27他	4	崖裾	2002年1月15日～9月13日		196
		鎌倉市御成町39番36	4	崖裾	2005年4月11日～6月21日、8月1日～8月6日、10月26日～11月4日		197
114	真言院北やぐら群	鎌倉市極楽寺2丁目946、943	2	崖裾	2004年5月18日～6月11日	床面に擂鉢状土坑24基	198
115	平六ヶ入やぐら群	横須賀市追浜町二丁目67-18、71-1	3	崖裾	2005年6月1日～7月8日		199
130	会下山西やぐら群	鎌倉市二階堂360	4	崖裾	2004年7月13日～9月14日、12月13日～12月27日	火葬址を伴うやぐら1基	200
		鎌倉市二階堂309～311	1	崖裾	2005年12月1日～12月27日		201
131	釜利谷赤坂やぐら群	横浜市金沢区釜利谷東4丁目3867-1	1	崖裾	2005年10月3日～10月12日		202
132	森戸やぐら	鎌倉市十二所字宇佐小路743番2、4	1	崖裾	2006年5月1日～5月15日	前面が石切跡に改変	203
133	日向やぐら	横須賀市浦郷町1丁目59番1	2	崖裾	2006年6月1日～6月22日	周辺に調査対象外のやぐら6基、横穴状遺構2基を確認	204
134	宅間谷東やぐら群	鎌倉市浄明寺二丁目471番、471番2・4・6、472番、474番16・18、481番1・2・12・13・15	11	崖裾	2003年6月4日～8月28日、2004年7月15日～8月26日、2005年2月1日～3月4日、2006年3月2日～3月22日	屋敷もしくは寺院の一部と考えられる建物跡、溝状遺構等を確認	205
135	極楽寺地蔵堂脇やぐら	鎌倉市極楽寺2丁目27-1	2	崖裾	2006年9月20日～9月26日		206
136	上行寺裏遺跡	横浜市金沢区瀬戸14-6	4	崖裾	2005年8月1日～9月30日、2005年10月13日～10月31日	1号やぐらは地下式坑、3号やぐらは副室を伴う	207
		横浜市金沢区瀬戸4249-34	2	崖裾	2006年7月18日～9月12日		208
137	光傳寺北やぐら群	横浜市金沢区六浦3丁目3535-1	12	崖裾・中段	2003年10月1日～10月156日		208
138	月輪寺やぐら群	鎌倉市十二所209、266	3	崖裾	2006年3月3日～3月15日		209
139	西野やぐら群	三浦市三崎5丁目121	2	崖裾	2007年1月19日～1月30日		210

※52・114・115は研究紀要8・10の遺跡番号、130以降は新番号付与

〔文献〕

- 196.森孝子 2005「無量寺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21(第2分冊)鎌倉市教育委員会
 197.菊川英政・宗臺富貴子 2006『鎌倉城(No.87)発掘調査報告書』(株)斎藤建設
 198.かながわ考古学財団 2006『真言院北やぐら群II』かながわ考古学財団調査報告194
 199.かながわ考古学財団 2005『平六ヶ入やぐら群II』かながわ考古学財団調査報告193
 200.かながわ考古学財団 2006『会下山西やぐら群』かながわ考古学財団調査報告196
 201.かながわ考古学財団 2006『会下山西やぐら群II』かながわ考古学財団調査報告204
 202.かながわ考古学財団 2006『釜利谷赤坂やぐら群』かながわ考古学財団調査報告197
 203.かながわ考古学財団 2006『森戸やぐら』かながわ考古学財団調査報告200
 204.かながわ考古学財団 2006『日向やぐら』かながわ考古学財団調査報告203
 205.かながわ考古学財団 2007『宅間谷東やぐら群』かながわ考古学財団調査報告207
 206.かながわ考古学財団 2007『極楽寺地蔵堂脇やぐら』かながわ考古学財団調査報告209
 207.かながわ考古学財団 2007『上行寺裏遺跡(瀬戸14番地やぐら群)』かながわ考古学財団調査報告211
 207.かながわ考古学財団 2007『上行寺裏遺跡(瀬戸14番地やぐら群)II』かながわ考古学財団調査報告217
 209.小林晴生・小林義典 2007『光傳寺北やぐら発掘調査報告書』玉川文化財研究所
 210.かながわ考古学財団 2007『月輪寺やぐら群』かながわ考古学財団調査報告212
 211.かながわ考古学財団 2007『西野やぐら群』かながわ考古学財団調査報告215